令和三年（二〇二一）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十七輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

講演録「今」を生きる―葉隠と禅、その現代的活用―

島　善高

講演録「今」を生きる―葉隠と禅、その現代的活用―

島　善高

目次

はじめに
一　利発
二　慈悲
三　正念
おわりに

はじめに

大倉精神文化研究所を創立した大倉邦彦は佐賀県の出身で、佐賀では『葉隠』という書物が非常に有名であり、志ある人はだいたい読んで知っております。大倉さんも『葉隠』を題材にした文章をたくさん書いていますので、[1]今日ここでお話の題材にするには一番ふさわしいと思って、「『葉隠』と禅」という副題を選ばせていただきました。

佐賀県は『葉隠』発祥の地で、江戸時代のはじめに、山本常朝（やまもとじょうちょう）（以下、常朝）のところに田代陣基（たしろつらもと）がやって来て、聞いた話を筆記してまとめた書物です。

常朝は佐賀市内の水ヶ江というところで生まれ、二代藩主鍋島光茂が亡くなった後に出家して、佐賀城から歩いたら約一時間、佐賀市金立町黒土原に隠棲生活しておりました。いま、山の中腹に「常朝先生垂訓碑」というものがあります。実は私はそのすぐ近くに生まれまして、どういう偉い人か知らないけれど、小さいときはこの辺でかくれんぼしたりして遊んでおりました。

『葉隠』は江戸時代には写本でずっと伝わっており、四〇種類くらいの写本がありました。しかし文字の統一がとれていないということで、幕末に佐賀藩の藩校弘道館で葉隠会というものが結成されまして、枝吉神陽が中心になって校訂作業が行われ、『葉隠聞書校補』[2]がつくられました。それによりますと、『葉隠』には約一四〇〇の話があって、佐賀藩のことがいろいろ書いてあり非常に面白い。第一巻から第一〇巻まであるのですが、第一巻と二巻が総論、あとは各論になっております。第一巻と第二巻をよく読めば、「あぁ、大体『葉隠』とはこういうものか」と分かるようになっております。

江戸時代に写本で出回っていた『葉隠』は、明治時代になりまして、大隈重信らが相当肩入れしまして、ようやく

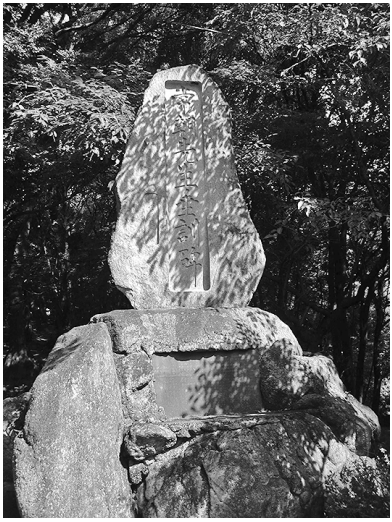

写真１　常朝先生垂訓碑
（佐賀県佐賀市金立町）

写真２　山本常朝の墓（佐賀市・龍雲寺）
「旭山常朝庵主」と刻まれている。

活字になって出版され、日本全国に広まるようになりました。[3] これによって他の都道府県の人は初めて『葉隠』の内容を知り、「これはすばらしい」ということで、いろんな関係本が出されました。しかし、なかには間違ったような、校訂がちゃんと行き届いていないものもありました。

その後、佐賀の栗原荒野先生が『校註葉隠』（青潮社）という分厚い書物を昭和一五年（一九四〇）に出しまして、これが定本と位置づけられています。また同じ年に、和辻哲郎、古川哲史という先生方が校訂して、上中下三冊で『葉隠』（岩波文庫）を出されました。これも定本の一つとして、いまでも非常によく売れています。しかし、いずれも昭和一五年のもので、ちょっと古いんですよね。

その後もたくさん関連書籍が出されましたけれども、平成二九年（二〇一七）ですからつい最近、菅野覚明という方とそのお弟子さんたち（栗原剛・木澤景・菅原令子）が、講談社学術文庫から上中下三冊を出されました。

この菅野先生という人は曹洞宗のお坊さんでありまして、曹洞宗あるいは禅に関しまして知識の非常にある方、ご自身で修行もなさった方でありますので、従来よく解釈のできていなかった文章も分かりやすい解釈で、「なるほど」と思うところがたくさんあります。もし『葉隠』をお持ちでない方は、原文と訳注もついていて、非常に便利ですのでお勧めします。

ところで、菅野先生が出す以前から『葉隠』について色んな研究書が出されていますけれども、それは難しい江戸時代の文章を普通の漢和辞典とか岩波の『広辞苑』とかで調べて解釈しようとしています。しかし『葉隠』は先ほども言いました、出家をした常朝、禅宗の坊さんが話したものを文章化したのでありますから、当然そこには禅の言葉がたくさん出てくるわけです。禅の言葉は、普通の辞典でいくら引いても意味は取れない。したがって、たくさんの注釈書が出ましたけど、どうも的を射ていない、そういう解釈も多かったんですね。そこで平成一四年、私は佐賀の葉隠研究会の総会で「『葉隠と禅』管見」と題して講演したことがあります。具体的には『葉隠』でよく使われている単語、例えば境目の「境」です。これをほとんどの注釈書が「ここからここととことの境目」という解釈しかしていない。これは間違いでありまして、この「境」は「人間の心の状態」「境地」「心境」というふうに解釈しないといけない。あるいは「自由」、現代の我々は「自由」という言葉をよく使いますけれども、本来は禅の言葉です。[4] それから「君、大丈夫か」という時の「丈夫」、これも元々は禅語ですね。そういう言葉を取り上げて、『禅学大辞典』などを引くなりして調べないとよくわからないということを話しました。未熟な文章ですが、『葉隠研究』第四八号（平成一四年一一月）に掲載していますので、興味のある方はご覧ください。

さて今回、講演の依頼をいただきまして、その後私が『葉隠』を読んで、まだまだ研究が足りない、注目されていないと思う単語がありますので、そのいくつかをここで紹介しようと思います。

一　利発

最初に取り上げさせていただくのは「利発」です。『葉隠』に次のような文章があります。

何和尚は**利発**にて、万事を押し付けて済まし申され候。今日本に手向ひ申す出家なし。替りたる事少しもなし、大根（おおね）を見届くる力ある人なきものなり。[5]

いろいろな注釈書がある中で、有名な歴史家でありました奈良本辰也という先生は、次のように現代語訳をされています。

ある和尚は、たいへん聡明な方で、万事をこともなげに解決してこられた。いま、日本中でこの和尚に匹敵する僧侶はいないであろう。といっても格別にかわったことはない。物事の根本を見抜く眼力を持った人がないというまでである。[6]

非常に聡明で、ものごとの根本を見抜く眼力も持っている。他の坊さんたちはなかなか太刀打ちできないと、この「ある和尚」を高く評価していますね。それから、松永義弘という方の現代語訳も大体同じであります。

ある和尚は、器量人で、万事人にまかせてすましてしまわれる。いま、日本でこの人の上を行く僧はいない。間違われたことは少しもない。物の本質を見届ける力のある人はいないものである。[7]

これもやはり「ある和尚」を高く評価しています。そして先ほど紹介しました、菅野氏も、

とある和尚は利発で、万事を人にまかせて済まされている。今、日本に手向かいする出家はいない。変わった人では少しもない。物事の根本を見届ける力のある人はいないものである。[8]

と、「ある和尚」は利発で、物事の根本を見届ける力のある人とはこの人だという解釈をしております。

これをぱっと見まして、私は「本当かな？」と思うわけであります。三つの注釈書ともに、ある和尚さんは非常に優れた人で、利発で、物事の根本を見届ける力のある坊さんだと、だから万事を人に任せて済ませているんだと解釈しているわけなんですが、私は結論を先に申しますと、

あるお坊さんは「才気走った人」で、何事も人に押し付けてしまう。ただちょっと才気があるから、今の日本ではこのお坊さんに面と向かって手向かうことのできる僧侶はいない。しかし、この和尚は大したことは何もしていない。世間には、人の本性を見抜く力を持っている人はいないものだ。

私は、この「ある和尚」はたいした人間ではないんだ、という文章だろうと思うんですね。皆さんがどうお考えになるか、今日は国語の勉強でございまして、もう一遍原文を見ますと、「利発」という言葉がどういう意味で使われているかを考えれば解けてくるということになります。

では、『葉隠』で「利発」が出てくる文章をいくつか見てみましょう。

今時の奉公人を見るに、いかう低い眼のつけ所なり。スリの目遣ひの様なり。大かた身のための欲得か、**利発だて**か、又は少し魂の落ち着きたる様なれば、身構へするばかりなり。我が身を主君に奉り、すみやかに死に切つて幽霊となりて、二六時中主君の御事を歎き、事を整へて進上申し、御国家を堅むると云ふ所に眼をつけねば、奉公人とは言はれぬなり。(9)

最近の奉公人、今でいうとサラリーマンは目の付けどころが低い、すりのような目をしていると、あまり良い評価をしていないですね。欲得で自分のためのことばかり考えているとありますので、「利発だて」をどう解釈するかは難しいですが、良い評価ではないというのは分かりますね。

次を見てみますと、

「**利発なる面**にて候間、やがて仕損じ申すべく候。殿様別けて御嫌ひなさるゝが、**利発めき候者**にて候。」（中略）**利発を面に出し候者**は、諸人請け取り申さず候。ゆりすわりて、しかとしたる所のなくては、風体宜しからざるなり。うや〳〵しく、にがみありて、調子静かなるがよし。[10]

「利発を面に出し候者」、皆さんも周りを思い出してごらんになれば「私、賢いよ」と顔に書いてあるような人がたまにいますよね。しかし、そういうのは「諸人請け取り申さず」、他の人はあまり信頼しないという。だから「利発」ということに良い評価を与えていません。

さらに

湛然和尚御申し候、「奉公人の**利発なる**は、のだたぬものなり。されども、ふうけの人になりたる事はなし。」と。[11]

とあります。文中にある「のだたぬ」というのは佐賀の方言で「伸びない」という意味で、そして「ふうけ」も方言でありまして「ばか者」という意味です。つまり、「利発」な人間は馬鹿にはならないけど、将来はあまり伸びない、ということです。

次は、常朝が自分のことを語っている文章です。

若年の時分より一向に、「殿の一人被官は我なり、武勇は我一人なり。」と骨髄に徹し、想ひ込み候故か、何たる**利発人**、御用に立つ人にても、押し下げ得申されず候。[12]

私は若い時からあまり大した才能はないけれども、殿様の一番役に立つ、私一人で殿様を助けるんだと言って、ずっと生きてきたというわけですね。そういう自分に対して「利発人」、つまり自分よりも賢そうな人、あるいは役に立ちそうな人はいっぱいいたけれども、愚直に、ただ殿様のためと働いてきた私を「押し下げ得申されず候」と。すなわち自分を押しのけたりするというような人はいないという意味です。したがって、「利発」という単語に相対

するのが、ここには書いてありませんが、「愚直な」とか「実直な」とかというものであるというのが見えてくるわけですね。

次の文章も見てみましょう。

何某は、第一顔の皮厚く、器量ありて、**利発者**にて、御用に立つ所もあり。この前、「その方は**利発**は残らず外へ出て、奥深き所なし。ちと鈍になりて、十の物三つ四つ内に残す事は成るまじきや。」と申し候へば、「それは成り申さず。」と申し候。ほしめかして公儀前などさすれば、何処までも仕て行くところあり。さりながら、御身辺、国家辺、重き事は少しもさせられぬだけなり。誰々と一風の者なり。**利発**・智慧にて何事もすむものと覚えて居るなり。**智慧・利発ほどきたなきものなし**。[13]

ある「利発者」に、賢いのが全部表面に出ているから三つか四つ、内面に秘めていたらどうかと言ったら、「それは成り申さず」と答えてきたとあります。これに対して結局、常朝は「智慧・利発ほどきたなきものなし」とまで言っているんですね。頭の中でいろいろ考えたこと、とっさのひらめきだけで何でもやっていこうとするのは駄目だと言っているのです。

この他にも、次のような「利発」の使用例が見られます。

若き時分、残念記と名づけて、その日〳〵の誤を書きつけて見たるに、二十三十なき日はなし。果もなく候故止めたり。今にも一日の事を寝てから案じて見れば、言ひそこなひ、仕そこなひ無き日はなし。さても成らぬものなり。**利発任せにする人**は、了簡に及ばざることなり。[14]

同人食事半ば召させられ候時申され候事。御城にて支度半ばに、「織部殿召まする。」と申し候に付て、その儘立つて手水使はれ候。舎人申され候は、「年配にも似合ひ申さず候。先づ支度御仕舞ひ候て御出で候へかし。」と申

されば候へば、「それは**利発人**の事なり。我等は召しまするとと聞いてよりは食物の味がせぬ。」と申して罷り出でられ候由。惣じて実義第一の人なり。それ故、子孫よきかと思はるゝなり。[15]

見懸**利発**に見へ候者は、よき事をしても目に立たず。人並の事しては不足の様に諸人存じ候。打ち見たる所柔和なる者は、すこし振よき事候へば、諸人褒美仕り候事。[16]

天下国家を治むると云ふは、及ばざる事、大惣の事の様なれども、今天下の老中、御国の家老年寄中の仕事も、この庵にて咄し候事より外はこれなきものなり。これにて成程治めてやる事なり。結句あの衆は、心元なき事あり。国学知らず、邪正の吟味せず、生れつきの**利発まかせ**にて、諸人這ひ廻り、おぢ畏れ、御尤もとばかり申すに付、自慢私欲出来るものにて候なりと。[17]

ここまで挙げてくれば、「利発」という言葉にはあまり高い評価を与えられていないことがわかると思います。『葉隠』と同じく、佐賀藩の人がよく知っている言葉に、鍋島直茂の書いた「直茂公御壁書二十一箇条」というのがあります。直茂は佐賀藩の初代藩主勝茂の父親で、藩祖といいます。その冒頭に、

利発は分別の花、花咲き実らざる類多し。[18]

とあります。分別というのは、既存の知識を総合して、物事を適当に分類して、瞬間的にパッパッと処理したり、判断したりする。現代風に言えば分析能力ですね。そういう能力が「利発」である、と。花は咲くだろうけど、しかし実はならないかもしれないという意味です。

常朝の先生格になる石田一鼎は、この文章を次のように註釈しています。

国君は国中の民を安んずる役者の頭人なり。国家の為に身を捨て玉ふをよく役儀を勤むと云ふ。家老諸臣は君の命を受けて万事を調ふるに、身を惜しまざるを義とす。然るにその道を知らず、我が為に楽を専らにする故、上

下共に我が儘の風となり、その実皆落ちてその花独り栄ゆると、古今の序に紀貫之が書きたるに等し。**利発とは気質の敏便なるを云ふ**。分別とは智徳を指す。人に天性の智徳あるは、道を知りて我を離れんが為なり。根本智は木の根の如く、後に得る智は花の如し。その役儀をよく調ふるは、実の熟するが如し。**我が為に智を用ゐる時は、利発の花ばかりにて、国家を治むる実は成らず**。この類の人世に多くなるは、上たる人の我が楽を求むる徴なり。[19]

石田一鼎も、自分のために智恵を用いる時は利発になると、花は咲くけど国を治めるというような大きな効果、功績を挙げることはできない、そう言っていることがおわかりになるだろうと思います。

ここまで「利発」の注釈、用例を見て参りましたが、最初の文章にもう一遍戻りますと、

何和尚は**利発**にて、万事を押し付けて済まし申され候。今日本に手向ひ申す出家なし。替りたる事少しもなし、大根を見届くる力ある人なきものなり。

利発だけれども、ちょっと賢いけれども、色んな人にものごとを押しつけるけれども、大した人間ではないと、変わったことをしたわけではないというようなことを言っているのではなかろうかと思うのですが、いかがでしょうか。

このように「利発」という単語に注目して一つ一つ細かに分析していくと、『葉隠』にはまだまだ解釈の余地があると思うわけです。

二　慈悲

次は「慈悲」でございます。

『葉隠』には「慈悲」という言葉の使用例が多くあります。そもそも『葉隠』の冒頭には「夜陰之閑談」というものがあり、そこに四つの誓願があります。

一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事。
一、主君の御用に立つべき事。
一、親に孝行仕るべき事。
一、**大慈悲**を起し人の為になるべき事[20]。

『葉隠』というのは、佐賀藩士に対して武士としての人生をきちんと送ってもらおうということで、作り上げられた文章です。この四つの誓願が大テーマ、大眼目で、一番に武士道におくれを取っちゃいけないとか、二番に主君の役に立つとか、三番の親に孝行、これは武士でなくても大切ですが、そうあります。

実は、先ほど触れた常朝の先生であった石田一鼎は『要鑑抄』という文章を書いており、そこには次のように書いてあるんですね。

一、武士道に於て未練を取るべからず。
一、先祖の名字を断絶すべからず。
一、畢竟主君の御用に立つべし[21]。

これらは、さきほどの三つに大体匹敵するわけですが、『葉隠』はここに「大慈悲を起し人の為になるべき事」を加えました。これが『葉隠』の『葉隠』たる所以であります。

常朝は二一歳の時、湛然和尚という人に参禅して血脈（けちみゃく）を受けたと言われております。湛然和尚は鍋島家の菩提寺である高伝寺の住職であったのですが、ある事件をきっかけにもう佐賀にいたくないと言って、福岡へ向かおうとして

北の方に去ります。ところが藩主は「待て待て待て」と言って、三人の家臣に命じて引き止めさせようとしたのです。そして彼らは「和尚さん、私たちの意見を聞いてくれないと帰ってもどうしようもない」と言い、その場で切腹するんですね。湛然和尚は「そこまでして自分を引き留めようとしてくれるのか」と思い、結局は福岡へは行かずに、佐賀市の北にある天山山地の中腹に隠棲して、華蔵庵という庵を結びます[22]。常朝はこの華蔵庵にいた湛然和尚に付いて坐禅の修行をして血脈を受けたということですが、常朝の父親も兄も同じく湛然和尚に参禅をして血脈を受けているということですので、小さい時からいろいろな教えを受けていたのでしょう。

そして常朝は、二代藩主鍋島光茂にずっと仕えておりました。当時追い腹と言って、主君が死ねば家臣たちも何人か一緒に死ぬという風習があり、常朝も光茂が亡くなった際にはそういう覚悟でいたわけです。しかしその光茂が追い腹禁止令、殉死禁止令を出すんですね。そのため常朝は切腹することができないので、四二歳の時に出家するわけであります。

前置きが長くなりましたけれども、常朝が書く文章にはそういう禅的な要素といいますか、物の考え方がしみこんでいるわけです。現在でも我々は「慈悲深い人だ」といったように、「慈悲」という言葉をよく使いますが、『葉隠』では

> 扨又御国は、根元、剛忠様御願力、隆信様御武勇、利叟様御善根、日峯様御勲功、泰盛院様御苦労にて、御家御長久に候へば、御家中として毎朝拝み奉るべき事に候。且又、御代々の大守に悪人これなく、鈍智これなく、日本の大名に劣らせらるゝ御器量遂にこれなく候。他方にては鍋島律儀と申す候由。**御慈悲の国守**ばかり御出来遊ばさるゝ候事、不思議の御事に候[23]。

とあり、剛忠様（龍造寺家兼）、龍造寺隆信、利叟様（鍋島清久）、日峯様（鍋島直茂）、泰盛院（鍋島勝茂）と「御

慈悲の国守ばかり」、龍造寺家、鍋島家の人はみんな慈悲深い人たちで、鍋島藩というのは慈悲の国である、藩主が家臣に対して、あるいは領民に対してよい施策をする、慈悲深いということが書かれています。二代目藩主の光茂も

〈金丸氏咄〉**御慈悲深く**御座候故、「御家中下々迄の上に、痛み候事これなき様に。」と、兼々思召し上げられ候。[24]

と、やはり領民に対して慈悲深い、そういう表現が見られます。

しかし『葉隠』の中にはそういう「慈悲」とはちょっと違うかなという「慈悲」がございます。ちょっと長い文章ではありますが、

大気と云ふは、**大慈悲**の義なり。神詠、「**慈悲**の目ににくしと思ふ人あらじ科のあるをばなほもあはれめ」。広く大なること限りなし。普くと云ふところなり。上古三国の聖衆を、今日まで崇め奉るも、**慈悲**の広く至るところなり。何事も、君父の御為、又は諸人の為、子孫の為とすべし。これ**大慈悲**なり。**慈悲**より出づる智勇が本の物なり。**慈悲**の為に罰し、**慈悲**の為に働く故、強く正しきこと限りなし。我が為にするは、狭く小さく小気なり。悪事となるなり。勇智の事は、この前得心せり。**慈悲**の事は、頃日篤と手に入りたり。家康公仰に、「諸人を子の如く思ふ時、諸人また我を親の如く思ふ故、天下泰平の基は**慈悲**なり。」と。また寄親・組子と申す事、親子の因み、一和の心を付けたる名かと思はれ候。直茂公、「理非を糺す者は、人罰に落つるなり。」と仰せられ候は、**慈悲**よりの御箇条かと存ぜられ候。「道理の外に理あり。」仰せられ候も**慈悲**なるべし。無尽なる事味ふべし。と精に入りて御咄なり。[25]

ここでは「大気」と「小気」が対比されています。「大気」というのは大慈悲のことで、「科のあるをばなほもあはれめ」とあります。また「何事も、君父の御為、又は諸人の為、子孫の為とすべし」。つまり慈悲というのは自分の

ためでなく、君父のため、あるいはいろんな人のため、子孫のためにすること。後からも出てきますが「利他行」、人のためになることが大慈悲である、と。そして、知恵とか勇気、これも本来は慈悲から出てこないといけないというわけですね。「慈悲の為に罰し、慈悲の為に働く」、人を処罰する、人を働いたり働かせたりするのは慈悲のためだから、「強く正しきこと限りなし」、根本に慈悲があるから正しい、と。

一方で「我が為にするは、狭く小さく小気なり」。なんでもいろんなことを自分のためばっかりする、分かりやすい言葉で言えば「自利」が小気というように区別してあり、それは「悪事となるなり」というわけです。

常朝は「慈悲の事は、頃日篤と手に入りたり」と、最近考えてよくわかったと言っています。直茂が「理非を糺す者は、人罰に落つるなり」と、「理」と「非」をはっきりと分けるというのはだめと言われたのは慈悲という観点から言われたのだろう。「道理の外に理あり」、慈悲の下に道理があるというわけです。

また他の文章では、「大慈悲」が次のように使われています。

人に意見をして疵を直すと云ふは大切の事、**大慈悲**、御奉公の第一にて候。意見の仕様、大いに骨を折ることなり。人の上の善悪を見出すは安き事なり。それを意見するも安き事なり。大かたは、人のすかぬ云ひにくき事を云ふが親切の様に思ひ、それを請けねば力に及ばざる事と云ふなり。何の益にも立たず。人に恥をかゝせ、悪口すると同じ事なり。我が胸はらしに云ふまでなり。意見と云ふは、先づその人の請くるか請けぬかの気をよく見わけ、入魂になり、此方の言葉を兼々信仰ある様に仕なし候てより、好きの道などより引き入れ、云ひ様種々に工夫し、時節を考へ、或は文通、或は暇乞などの折か、我が身の上の悪事を申し出し、云はずしても思ひ当る様にか、先づよき処を褒め立て、気を引き立つ工夫を砕き、渇く時水呑む様に請け合せ、疵直るが意見なり。殊の外仕にくきものなり。年来の曲（くせ）なれば、大体にては直らず。我が身にも覚へあり。諸朋輩兼々入魂をして、曲を

直し、一味同心に主君の御用に立つ所なれば御奉公**大慈悲**なり。然るに、恥をあたへては何しに直り申すべきや。[26]

同じ藩の中にいろんな癖の悪い人間がたくさんいる。しかし、それをその人に「お前ももう少し立派な、まじめな行動をとった方がいいんじゃないか」と意見すると、結局その人は怒るわけですね。だから普通の人は、嫌われたりするから注意したりしないというわけですが、それは良くない、と。言いにくいけれども何とか言えるような関係を作って、自分の言うことを聞かせるよう工夫して、まっとうな人間にしてやる。そうすると佐賀藩のために働く侍も増えていく。「大慈悲、御奉公の第一にて」「御奉公大慈悲なり」という言い方です。ほかにも、

上下万民の心入れを直し、不忠不義の者一人もこれなく、悉く御用に立て、面々安堵仕り候様に仕なすべしと、大誓願を起すべし。伊尹が志の如し。大忠節・**大慈悲**なり。人の癖を直すは我が癖を直すよりは仕にくきものなり。先づ一人もえせ中を持たず、近付は素より、見知らざる人よりも、恋ひ忍ばるゝやうに仕なすが基なり。我が身にても覚へあり。相口の人より云はるゝ意見はよく請くるなり。[27]（後略）

ここでは古代中国の政治家である伊尹（いいん）の故事が出てきます。伊尹は殷王朝の成立に非常に貢献したわけですが、四代目の王・太甲（たいこう）があまり良い人間ではなかったので、王位から追放するんですね。しばらく伊尹がその国を治めますが、追放された太甲は非常に後悔して、まっとうな人間に変わって戻ってくる。そうすると伊尹は改心して戻ってきた太甲を受け入れて、ふたたび王に戻したのです。[28] つまり最初から優しく相手と接するのではなくて、時には厳しく処罰をしたりあるいは追放したり、それが大きな目からみれば結局はいいことである、と。大慈悲というのは高みのある慈悲と言いましょうか、そういう意味合いで使っております

さて、それからもう一つ、『葉隠』には「慈悲門」という言葉も出てまいります。

自他の思ひ深く、人を憎み、えせ中などするは、**慈悲**のすくなき故なり。一切悉く**慈悲の門**に括り込んでからは、

あたり合ふことなきものなり。[29]

恩を受けたる人、懇意の人、味方の人には、たとへ悪事ありとも潜かに意見いたし、世間にはよき様に取り成し、悪名を云ひふさぎ、誉め立て、無二の味方・一騎当千になり、内々にてよく受け候様に意見すれば、疵も直り、よき者になるなり。誉め立て候へば、人の心も移り、自然と悪しき沙汰止むものなり。すべて**慈悲門**に括り込みて、よくなさねば置ぬ念願なりと。[30]

仏教の根本は「慈悲」でありますけれども、慈悲は何かといいますと、先ほど出てきましたように、人のために何かをするということ、利他行です。利他の精神と置き換えても構わない。人のためになる、そういう利他の精神を育むようにする。それを言い換えれば「慈悲門」という言葉になるかと思います。

そして、湛然和尚の教えを例にして「慈悲」について、次のような文章があります。

堪然和尚平生の示しに、出家は**慈悲**を表にして内には飽くまで勇気を貯へざれば、仏道を成就する事成らざるものなり。武士は勇気を表にして、内心には腹の破るゝ程**大慈悲**を持たざれば、家業立たざるものなり。これに依つて、出家は武士に伴ひて勇気を求め、武士は出家に便りて**慈悲**を求るものなり。我数年の褊衫（へんさん）に、知識に逢ひて修行の便になりたる事一つもなし。それ故、所々にて勇士とさへ聞けば、道の難儀をも厭はず尋ね行き、武道の咄を聞きしが、これにて仏道の助けになりたる事、しかと覚えあり。まづ武士は武具を持つに依つて、それを力にしてなりとも、敵陣に駆け入らるゝなり。出家は珠数一連にて鎧・長刀の中へ駆け入る事、柔和・**慈悲心**ばかりにて何としてなるべきや。大勇気なくして駆け入らるべからず。その証拠には、大法事の時、焼香をする和尚などが、ふるはるゝなり。勇気なき故なり。よみがへる死人を蹴倒し、地獄の衆生を引き上ぐる事、皆勇気の業なり。然るに、近代の出家皆あらぬ事を取り持ち、殊勝柔和になりたがり、道を成就する者なし。剰へ武士に

仏道をすゝめ、すくたれ者に仕なす事、残念の事どもなり。年若き侍などの仏道を聞くは、以ての外の僻事なり。仔細は物が二つになる故なり。一方向きにてなければ、益にたゝぬものなり。隠居閑居の老人などは、遊び仕事に仏法を聞くもよし。武士たる者は、忠と孝とを片荷にし、勇気と**慈悲**とを片荷にして、二六時中、肩の割り入るほど荷ふてさへ居れば、侍は立つなり。朝夕の拝礼、行住座臥、「殿様々々」と唱ふべし。仏名真言にすこしも違はざるなり。又常に氏神につりあうて居るべし、運強きものなり。又**慈悲**といふものは、運を育つる母の様なものなり。無慈悲にして勇気ばかりの士、断絶の例、古今顕然なり、と。[31]

「出家」と「武士」を対比して、「出家」は表面に「慈悲」がなければならないし、しかし内心には勇気がある。「武士」には勇気が表面にあって、心の中には「腹の破るゝ程大慈悲」を持たなければならない。つまり武士が慈悲心を持たないで、勇気ばかり持っていてはだめだと、そういう武士は断絶するというわけです。先ほども触れましたが、『葉隠』にある有名な言葉、「慈悲より出づる智勇が本の物なり」ということです。

大隈重信は佐賀出身で、明治・大正に二度総理大臣となり、早稲田大学をつくったということで、皆さんご承知でしょう。最晩年の大正六年（一九一七）に佐賀に戻りまして、五月二一日に菩提寺の龍泰寺で法要を営み、そこで講演しました。その時に自分の一生を振り返って、

慈悲は家族制度の根本である許りでなく、又実に勇気の源である。吾々が三百年来養はれ来つた葉隠の根本的精神にも亦、此慈悲を重ずる事があり、所謂四誓願が葉隠の根本を為している。吾輩微力短才にして今日の地位に在るは実に龍造寺鍋島の遺沢、殊に名君閑叟公撫育の賜である。[32]

と、大隈さんも「葉隠の慈悲の精神があったから今日の私がある」と、『葉隠』に触れているわけであります。大隈さんの家はちょっと裕福でしたので、貧乏な人に小遣いをやったりとか、お菓子を与えたりとか、あるいは大隈さん

は大きくなってからはいろいろなところに寄付したりとかしています。小さいころからこうした環境で育ち、その根本には『葉隠』の慈悲の精神があったということです。

三　正念

あと『葉隠』によく出てくるのが「念」という字です。「正念」とか「一念」、「無念」とか「残念」とか、「念々正念」など、いろいろな熟語で出てまいります。「念」という単語は出てきませんが、聞書第二の九〇番に、次のように書かれています。

貪（とん）・瞋（じん）・痴（ち）と、よく撰り分けたるものなり。世上の悪事出来たる時、引き合ひて見るに、この三箇条に迦（はず）るゝ事なし。吉事を引き合ひて見るに、智・仁・勇に洩れずとあり。[33]

我々が悪いことをする原因をずっと探っていくと、「貪」「瞋」「痴」にたどり着く。「貪」とは人よりおいしいものを食べたい、人よりいいものを着たいとかいう貪り。それから「瞋」は怒り、「痴」は愚痴をこぼす。そういうものがある。一方で良いことをした時には「智」「仁」「勇」が根本にある、と。これは儒教的、仏教的な言い方をすると、「智」と「仁」が「慈悲」になりますね。したがって心の奥底をずっと追求していくと、良い要素もあれば悪い要素もあって、色んな考えがポッポッポッと心の奥底に出てくる。そのポッポッと出てくるのが「念」であります。「念（おも）う」、いろいろなものが出てくるんですね。

そして最初の「念」がポッと出てくると、そこから「念」がずっと連なっていって、あらぬ方向へ行ってしまうということがあります。では、どうすればいいのか。禅では「無念無想」「無念無心」、無念になればいい、念じなけれ

ばいいということになりますが、『葉隠』には堪然和尚の話として、

湛然和尚の物語に、「無念無心とばかり教ふる故に、落ち着かせぬなり。**無念と云ふは正念の事**なり。」と仰せられ候。面白き事にて候。実教卿（さねのり）も、「一呼吸の中に邪を含ぬ所が、則ち道なり。」と仰せられ候。然れば道は一ツなり。この光を、先づ見付くる者もなきものなり。純一になる事は、功を積むまでは成るまじき事なり。[34]

とあります。例えば「無念無心」と邪を、「貪」「瞋」「痴」を無くそうとしても無理だと。それよりも「貪」「瞋」「痴」という念がポッポッと湧いてきたら、その横の方にある「智」「仁」「勇」という「正念」に集中すれば、どこか脇に行ってしまう。「この光を、先づ見付くる」、そういう関係であるわけです。

「人として肝要に心懸け、修行すべき事は何事にて候や。」と問はれ候時、何と答へこれあるべきや、まづ申して見るべし。**只今正念にして居る様**になり。諸人心が抜けてばかり見ゆるなり。**活きた面は正念の時なり**。万事をなす内に、胸に一つ出来る物あるなり。これが君に対して忠、親には孝、武には勇、その外万事につかはるゝものなり。これを見つくる事もなりがたし。見つけて不断持つ事又なりがたし。只今の当念より外はこれなきなり。[35]

人間が一番素晴らしくあるためにはとにかく「正念にして居る様」、そういう状態にいなければならない。「活きた面は正念の時なり」と。そして「正念」であるならば、どんな人に対しても「万事につかはるゝもの」、何でもできるということであります。

打ち見たる所に、その儘、その人々の長分（たけぶん）の威が顕はるゝものなり。引き嗜む所に威あり、調子静かなる所に威あり、詞寡き所に威あり、礼義深き所に威あり、行義重き所に威あり、奥歯噛して眼差尖（するど）なる所に威あり。これ皆、外に顕はれたる所なり。畢寛は気をぬかさず、**正念なる所**が基にて候となり。[36]

「正念」でいる時には、ちょっとした姿、恰好を見ただけでも、静かにしていても威力というか、威勢があるとい

うわけであります。

また「一念」がどういう役割を果たすか、これについては面白い例ですが、新田義貞、大野道賢という二人の人物が取り上げられています。

出し抜きに首打ち落されても、一働きはしかと成る筈に候。義貞の最期証拠なり。心かひなく候て、その儘打ち倒ると相見え候。大野道賢が働きなどは近き事なり。これは何かする事と思ふぞ只一**念**なり。武勇の為、怨霊悪鬼とならんと大悪念を起したらば、首の落ちたるとて、死ぬ筈にてはなし。[37]

新田義貞は鎌倉時代末期の武士ですけれども、藤島の戦いで矢が眉間に当たるんですね。「あぁ俺はもう死ぬなぁ、しかしこのまま死んだら首を持っていかれる」と思い、自分の刀をさっと抜いて首を斬って、目の前の穴に頭を入れて隠し、倒れて死んだと言います。[38]本当にそんなことができるかどうかは知りませんけれども、これは首を敵に取らせてなるものかという「一念」があったからという訳です。また大野道賢（道犬）は大坂の陣で豊臣方に付いて徳川家康と戦った武士です。堺の町に火を付けたという理由で火あぶりの刑に処されたのですが、役人が本当に焼けたかどうかを調べようとしたら、焼けた大野は立ち上がって役人を切り付けて、そして灰となってボロボロと崩れたという逸話があります。[39]これもまた戦うという「一念」があるからだというわけです。精神的なものですが、「一念」があれば起こりうるというのです。

だから、「正念」をずっと持ち続ける、「一念」が大切なのです。

端的**只今の一念**より外はこれなく候。**一念々々と重ねて一生なり**。こゝに覚えつき候へば、外に忙（せは）しき事もなく、求むることもなし。こゝの一**念**を守つて暮すまでなり。皆人、こゝを取り失ひ、別にある様にばかり存じて探促いたし、こゝを見つけ候人なきものなり。守り詰めて抜けぬ様になることは、功を積ねばなるまじく候。されど

も、一度たづりつき候へば、常住になくても、最早別の物にてはなし。この一念に極り候事を、よく〳〵合点候へば、事すくなくなる事なり。この一念に忠節備はり候なりと。[40]

「貪」「瞋」「痴」の念慮などがあると、とんでもない悪いことをする。そうではなくて良い念慮を、「一念々々」と重ねて一生続けていくしかない。他にも

当念を守りて、気ぬかさず、勤めて行くより外に、何も入らず、一念々々と過ぐす迄なり。[41]

と、いろいろな所で「一念一念」と「当念」を守っていくしかないと書いています。

禅寺に行きますと「正念相続」、正しい念をずっと続けていく、あるいは「念念正念」「正念相続」という言い方がされます。『葉隠』に書いてあるのも、このことと同じことです。

おわりに

さて「正念」についてこのように言及していますが、どうやって持ち続ければいいのでしょうか。『葉隠』が仏教書という側面があるならば、もう少し詳しく解説した方がいいと思うのですが、そこはちょっとしか書かれておらず、物足りないところです。あえて探してみますと、先ほど紹介した「夜陰の閑談」にある次の文章が参考になるでしょう。

薬罐道心にて、さめ易き事あり。それは、さめぬ仕様あり。我等が一流の誓願、

一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事。

一、主君の御用に立つべき事。

一、親に孝行仕るべき事。
一、大慈悲を起し人のためになるべき事。
この四誓願を、毎朝仏神に念じ候へば、二人力になりて、後へはしざらぬものなり。尺取虫の様に、少しづゝ先へにじり申すものに候。仏神も、先づ誓願を起し給ふなり。[42]

薬罐はお湯が沸いてもすぐ冷めてしまいますよね。道心が出てきても長続きしない。テレビを見て「これいいな」と思ってもその日の晩だけで、翌日には続かない。なかなかいいと思っても続かない、冷めやすい。ではどうするかと言うと、毎日毎日お祈りのように唱えてやっていくしかないというわけです。

仏教には「四弘誓願（しぐぜいがん）」、四つの誓願というものがあります。

衆生無辺誓願度
煩悩無尽誓願断
法門無量誓願学
仏道無上誓願成[43]

これを常に、何かあるごとに唱えるのです。それと同じように『葉隠』の四誓願を、「一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事。一、主君の御用に立つべき事。一、親に孝行仕るべき事。一、大慈悲を起し人のためになるべき事。」と、毎日唱え続ければ少しずつ少しずつ進んでいく、あるいは少なくとも後ろへは進まない。恐らく、常朝は出家してから四弘誓願をずっと唱えていて、それをヒントにして、『葉隠』の四誓願を書いたのだろうと思います。

ですから「正念」、例えば「大慈悲、大慈悲、大慈悲……」と唱えることを守っていって、とりあえずは近場、自分のできる範囲で少しずつやっていく、大慈悲を起こしていけば少しずつ進歩していくと思います。

ただ「正念」、正しい念慮が出ても時には慢心が出るんですね。ある坐禅道場で貧しい人が修行していて、みすぼらしい恰好であるお坊さんに会いに行ったら、「おぉ、わしも君たちみたいに若い時にはそんな修行していたんだ、頑張れ」と言われたそうです。そのお坊さんは自分で修行が終わったと思っている。それではだめなんですね。

宗龍寺江南和尚に、美作守殿・一鼎など学文仲間面談にて学文咄を仕懸け申され候へば、「各は物識りにて結構の事に候。然れども道にうとき事は平人には劣るなり。」と申され候に付、「聖賢の道より外に道はあるまじ。」と一鼎申され候。江南申され候は、「物識りの道に疎き事は、東に行く筈の者が西へ行くがごとくにて候。物を知るほど道には遠ざかり候。その仔細は、古の聖賢の言行を書物にて見覚へ、咄にて聞き覚へ、見解高くなり、はや我が身も聖賢の様に思ひて、平人は虫の様に見なすなり。これ道に疎き所にて候。道と云ふは、我が非を知る事なり。念々に非を知つて一生打ち置かざるを道と云ふなり。聖の字をヒジリと訓むは、非を知り給ふ故にて候。仏は知非便捨（ちひべんしゃ）の四字を以て我が道を成就すると説き給ふなり。心に心を付て見れば、一日の間に悪心の起ること数限りなく候。我はよしと思ふ事はならぬ筈なり。」と申され候に付、座中それより崇敬いたされ候由。然れども武篇は別筋なり。大高慢にて、吾は日本無双の勇士と思わねば、武勇をあらはすことはなりがたし。武勇をあらはす気の位これあるなり。〈口伝〉[44]

日本人は位の高い人を「聖」といいますね。『広辞苑』を引いたら、ひじりは「日知り」「日のように天下の物事を知る人」とあります。しかし『葉隠』では、自分の不足を、足りないところをよく知っている人、つまり「非知り」と解釈している。果たして当たっているかどうかは知りませんが、なかなか面白い解釈だと思います。だから偉くなればなるほど自分の非を知って、死ぬまで自分は不足不足と思うのでしょう。

修行に於ては、これまで成就といふ事はなし。成就と思ふ所、その儘道に背くなり。一生の間、不足々々と思ひ

て、思ひ死するところ、後より見て、成就の人なり。[45]

『葉隠』にはこうならなければならないと記されています。ご清聴ありがとうございました。[46]

（付記）本稿は、平成三一年（二〇一九）三月一六日、横浜市大倉山記念館ホールにて行われた大倉山講演会の講義録を基としています。講師の島善高氏は令和二年（二〇二〇）九月四日に逝去されました。生前に本論集への掲載の許可を得ておりましたので、テープ起しを行い、当研究所研究員の星原大輔が文意を損なわないように努めた上で、本文に加筆補正を施し、注を付しました。また講演当日に配布されたレジメの資料及び紹介された画像を、適宜本文中に挿入しました。したがって本稿の本文また注の文責は、一切星原にあります。

注

（1）例えば、大倉邦彦「葉隠の眞髄」（西田長男編『葉隠講話』収録、有精堂出版部、昭和一七年）などがある。

（2）今日に至るまで『葉隠』研究の根幹的基礎資料であり、平成一七年（二〇〇五）にはじめて佐賀県近世資料編さん委員会編『佐賀県近世史料』第八編第一巻（佐賀県立図書館）に活字収録された。

（3）『葉隠』の最初の刊本は、明治三九年（一九〇六）、佐賀市の小学校教員中村郁一が全体の三分の一を抄録して自費出版した『葉隠』（丁酉社）である（小池喜明『葉隠―武士と「奉公」―』、講談社、平成一一年、四三頁）。それから一〇年後の大正五年（一九一六）、中村は全文を収録し、葉隠記念出版会から『鍋島論語葉隠 全集』を刊行した。同書の冒頭にある「本書出版の経緯」に、次のように記されている。

大隈侯爵閣下は、本書出版の為めに序文掲載を許諾せられたるのみならず、種々の指導と高助とを給り、公私の席上機会ある毎に本書出版に勢援を与へられました。本出版の閣下に負ふ所極めて大なる者があります。

（4）島善高「中江兆民の『自由』について」（『法史学研究会会報』八、法史学研究会、平成一五年）などを参照。
（5）「聞書第一」一六六（和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』上、岩波文庫、昭和一五年、七七頁）。以下、『葉隠』の引用文は上掲書の上中下による。
（6）奈良本辰也『日本の名著17 葉隠』（中央公論社、昭和五九年）一一〇頁。
（7）松永義弘訳『葉隠』上（教育社、昭和五五年）一二一頁。
（8）菅野覚明・栗原剛・木澤景・菅原令子 新校訂全訳注『葉隠』上（講談社学術文庫、平成二九年）二四二頁。
（9）「聞書第一」三五（前掲注5『葉隠』上、三六頁）。
（10）「聞書第一」一〇八（前掲注5『葉隠』上、六三頁）。
（11）「聞書第一」一八〇（前掲注5『葉隠』上、八一頁）。
（12）「聞書第二」六三（前掲注5『葉隠』上、一一三頁）。
（13）「聞書第二」九七（前掲注5『葉隠』上、一二三頁）。
（14）「聞書第一」一七三（前掲注5『葉隠』上、七九頁）。
（15）「聞書第七」四七（前掲注5『葉隠』中、一八二頁）。
（16）「聞書第十一」九六（前掲注5『葉隠』下、一九四頁）。
（17）「聞書第十一」一六九（前掲注5『葉隠』下、二一八頁）。
（18）「直茂公御壁書」二十一箇条（栗原荒野『校註葉隠』青潮社、一〇一〇頁）。
（19）典拠は、石田一鼎「喬木真宝」（『佐賀県近世史料』第八編第三巻、佐賀県立図書館、四八〇頁）。引用するにあたって、カタカナはひらがなに改めるなど、読みやすく適宜修正した。
（20）「夜陰之閑談」（前掲注5『葉隠』上、二一頁）。
（21）石田一鼎「要鑑抄」（前掲注19『佐賀県近世史料』第八編第三巻、四六頁）。引用するにあたって、書き下し文に改めた。

(22) 前掲注6『日本の名著17 葉隠』一九～二六頁。
(23) 「聞書第四」八一（前掲注5『葉隠』上、二〇七頁）。
(24) 「聞書第五」一三（前掲注5『葉隠』中、三三頁）。
(25) 「聞書第一」一七九（前掲注5『葉隠』上、八〇頁）。
(26) 「聞書第一」一四（前掲注5『葉隠』上、二八～二九頁）。
(27) 「聞書第二」一二九（前掲注5『葉隠』上、一三八頁）。
(28) 『史記』殷本紀第三（『新釈漢文大系38 史記 一（本紀）』、明治書院、昭和四八年、一二三～一二五頁）。
(29) 「聞書第二」一〇八（前掲注5『葉隠』上、一二七頁）。
(30) 「聞書第二」一一九（前掲注5『葉隠』上、一二七頁）。
(31) 「聞書第六」一八（前掲注5『葉隠』中、九二～九三頁）。
(32) 『大隈侯爵講演集：帰郷記念』（大隈侯講演集記念刊行会、大正七年）五～六頁。
(33) 「聞書第二」九〇（前掲注5『葉隠』上、一二一頁）。
(34) 「聞書第一」三九（前掲注5『葉隠』上、五八頁）。
(35) 「聞書第一」六一（前掲注5『葉隠』上、五八頁）。
(36) 「聞書第二」八九（前掲注5『葉隠』上、一二一頁）。
(37) 「聞書第二」五二（前掲注5『葉隠』上、一〇九頁）。
(38) 『太平記』巻第二〇「義貞自害事」に、次のような文章がある（『日本古典文学大系35 太平記 二』、岩波書店、昭和四一年、三二〇頁）。

義貞弓手の足をしかれて、起あがらんとし給ふ処に、白羽の矢一筋、真向のはづれ、眉間の真中にぞ立たりける。急所の痛手なれば、一矢に目くれ心迷ひければ、義貞今は叶はじとや思けん、抜たる太刀を左の手に取渡し、自ら頸をかき

切て、深泥の中に蔵して、其上に横てぞ伏給ひける。

(39) 大野道賢の逸話は、「聞書第七」六七（前掲注5『葉隠』中、一九四～一九五頁）と、「聞書第十」五六（前掲注5『葉隠』上、一一九～一二一頁）を参照。

(40) 「聞書第二」一七（前掲注5『葉隠』上、九七頁）。

(41) 「聞書第二」二〇（前掲注5『葉隠』上、九八頁）。

(42) 前掲注20「夜陰の閑談」（前掲注5『葉隠』上、二〇～二一頁）。

(43) 本文中に掲示した「四弘誓願」は禅宗（曹洞宗・臨済宗・黄檗宗）の偈文。宗派によって若干異なっており、真言宗は「衆生無辺誓願度、福智無辺誓願集、法門無辺誓願学、如来無辺誓願事、無上菩提誓願成」の五句、天台宗は「衆生無辺誓願度、煩悩無辺誓願断、法門無尽誓願知、無上菩提誓願證」の四句となっている（塚本善隆［ほか］編『望月佛教大辞典 第二巻』、世界聖典刊行協会、昭和三六年［増訂］、一七五五～一七五六頁）。

(44) 「聞書第一」四七（前掲注5『葉隠』上、四二頁）。

(45) 「聞書第一」一三九（前掲注5『葉隠』上、七二頁）。

(46) 講演後の質疑応答にて、「慈悲を現代的に訳すと、思いやりとか優しさという言葉で解釈してよいのか」という質問に対して、島氏が次のように回答したことも付記しておく。

儒教では「仁」と言いますね。書物の中に出てくるのは、道端を歩いていて、子供が井戸か何かに落ちようとしているのを見た瞬間、良いとか悪いとか何にも考えずに、「危ない」といって走って抱きかかえる。そういう行動に出ることが「仁」。それに仏教で匹敵するのが「慈悲」です。慈悲の「悲」という字があるように、お金を持っていれば色々やれるのですが、なくても苦しんでいる人がいたら側へ行って、一緒に涙を流す。そういう気持ちがあるかないかではないでしょうか。書物を二、三冊読んで「それはこうだ、ああだ」と言っても何の役に立たない。実際に行動してみないといけない、根本はそういうところではないかと、私は思います。